

令和元年度第2回 京都市市民参加推進フォーラム 摘録

■開催日時：令和元年9月19日（木） 午後6時30分～午後8時30分

■開催場所：職員会館かもがわ2階 中会議室

■議題：

- （1）市政総合アンケートの実施について
- （2）施策2，3，7，9，10の進捗管理について
- （3）令和元年度第1回市民公募委員サロンの実施結果等について

■報告事項：

- （1）新たに設置された附属機関等について
- （2）市民参加に関係する新しい事業や取組について

■公開・非公開の別：公開

■出席者：

市民参加推進フォーラム委員12名

（池田委員，乾委員，内田委員，金田委員，佐々木委員，篠原委員，橋本委員，
杉山委員，ハッカライネン委員，壬生委員，森川委員，森実委員）

■傍聴者：1名

■特記事項：

動画共有サイトYouTube（ユーチューブ）を利用し，後日，音声配信を実施する。

【議事内容】

1 開 会

2 座長挨拶

<杉山座長>

早速，事務局から議題と本日の流れについて説明をお願いします。

<事務局>

（議題の説明，資料確認，時間配分について説明）

3 議題

議題（１）市政総合アンケートの実施について

<杉山座長>

議題「市政総合アンケートの実施について」に入りたいと思う。事務局から資料の説明をお願いする。

<事務局>

（資料１「市政総合アンケートについて（案）」説明）

<杉山座長>

説明いただいたことについて、質問等あればいただきたい。

<佐々木委員>

第１回に参加していないせいか、そもそもアンケートが議題として挙がっているのが唐突に感じた。毎年実施している市政総合アンケートが、今回は市民参加というテーマなので、この場に議題として挙がってきたという位置づけになるのか。

<事務局>

今年度実施する内容として、まずは「第２期市民参加推進計画の進捗管理」ということで、他都市の先進事例を調査するとしている。また、今年から来年度にかけては次期計画を策定していく時期になっているため、市政総合アンケートを活用してアンケート調査を実施するということを提案した。さらに、京都市の市民参加についてのこれまで２０年間の取組を総括するということで、歴代フォーラム座長に事務局がヒアリングに行くということを予定している。

以上のことを前回の会議で確認しており、市政総合アンケートは次期計画策定に向けた取組の一つとして実施するものである。

<佐々木委員>

「第２回市政総合アンケート」とあるのは、すでに別の取組でやっているということか。

<事務局>

そうである。市政総合アンケートは色々なテーマで実施しており、今回は市民参加について聴こうということでやるものである。

<佐々木委員>

承知した。

<ハッカライネン委員>

問 15 の属性についてだが、例えば「外国籍の人かどうか」と国籍を聴くことについて、意味はないのか。市民に外国籍の人もいるということを意識してもらいたい。外国人がどの程度回答してくれるのか分からないが、日本人と外国人の結果に違う傾向が見えたら面白いのではないかと思う。

<事務局>

モニター登録されている方の中に外国籍の方が登録されているかということについては把握していない。性別や年齢、お住まいについては回答いただくことになっているが、外国籍市民か否かということまで把握できるかということについては持ち帰って確認させていただく。

<ハッカライネン委員>

モニターとなる人にはどのように広報しているのか。外国人の方にモニターになるということが伝わっているのかという点は疑問である。外国籍市民にももっと声をかけるように何か工夫が見えたらよいなと思った。

<乾委員>

22 年度に実施されているが、その時のアンケートの結果が具体的にどういう風なところに反映されたのか気になる。

仮説があってアンケート調査を行っているのだと思う。モニターは 1,000 人だが、それ以外にもとった方がいいのでは、とか、そういうことも考えて設定した方がいいのかもしれないと思った。

22 年度に実施して、どんなところに反映されて、それはうまくいっていたのか。うまくいってなかったのであれば、アンケートの取り方、設計、内容についてももう少し検討した方がいいのではないかと思った。

<事務局>

アンケートの対象者については、1,000 人としており、この枠組みを変えて実施することは難しい。お住まいや年齢等については人口構成に合わせた形で回答いただくことができる方法で実施することとしている。

それ以外に個別にアンケートを取る、ということについては、必要であれば我々が独自で実施することは可能である。

<ハッカライネン委員>

それは、外国人向けのアンケートも可能だということか。

<事務局>

聴く内容があれば、何か工夫ができるかもしれない。

<森実委員>

22年度の結果を見ているが、調査対象を見ると「20歳以上の市民3,000人」とあり、「住民基本台帳から無作為抽出した市民」とある。10年前は“できる限り幅広く調査しよう”と実施されていたようだ。今回、コストや事情があるのかもしれないが、ネットモニターということであると、年齢層や登録されている方自体に偏りがあるのではないか。他の調査であればいいが、「市民参画」という、できる限り色んな声を集めようという調査であるので、どういう風に声を拾っていくかという点については検討いただきたいと思った。

<事務局>

アンケートの調査方法について補足する。確かに昨年度までは、3,000人を対象として、無作為抽出で選出した方に回答いただいていた。ただ、回答を強制することはできないので、回収された回答には年齢層や偏りがあり、京都市の人口構成とズレた結果になったということがあった。今回の方法では、人口構成に合わせた回答が得られるものである。

<佐々木委員>

調査対象については、「民間のモニター登録会社に登録する市民」とのことであるが、既に登録していて年齢層等も把握した状態でとるとということか。インターネット調査だと、ぱっと見、高齢者の方の回答が少なくなるのではないかと思いがちなのだがそうではないのか。

<事務局>

モニター登録会社には多くの方が登録されているとのことであり、担当課からは適正に結果が出ると聞いている。

インターネット調査ということで、普通に考えれば若い人中心に回答が返ってくると思われるかもしれないが、この仕組みでは京都市の年代別に応じた形で登録されている方を選択して、アンケートに答えていただくという形になっており、偏りはない。

今までやっていたアンケートと著しく乖離がないかという点については、昨年度別の案件で実施した際の結果は、従来の結果と遜色ないものであった。そのため、今年度から正式に採用して実施している。

外国籍市民がどの程度含まれているのかという点については私も知らないもので、もう一

度調べてみたいと思う。

<杉山座長>

先ほど乾委員から質問のあった、「前回のアンケートがどのように計画に反映されていったか」という点については、もし把握していれば説明いただけたらありがたい。

<事務局>

問 1 の「市政参加の制度の認知度」については、前回のアンケートでも聞いている。各制度を「知らない」という方が多いという結果がでており、「広報，周知をしっかりとやっていこう」というのは、この間取り組んできていることである。

また、前回のアンケート報告書 4 ページの問 4 「市政に対する市民の関わり方は、どのようなものが良いか」という点については「地域団体等の代表者を通じて意見を反映させるほうがよい」に次いで「直接，意見や考えを提案したり，協働したりする方がよい」という回答が多く，協働の取組がより進めていくべきものとして認識されているのではという観点から，第 2 期計画には協働の取組を盛り込んで，この間進めてきているところである。

<乾委員>

このアンケートは，状況把握が目的なのか，もう少し，何か戦略をもって設計してやっていくのか，どちらなのか気になった。状況把握といった側面の方が強いのだろうか。

<事務局>

まずは状況把握ということが目的の一つである。また，次の計画策定に向けて，市民が京都市に求めているものは何かということについて把握するべく，市政参加，まちづくり活動の両方の領域にその点について聴く設問を設けており，両方の設問数も，前回は市政参加について聴く設問が多かったのに対し，ほぼ同数としている。

<橋本委員>

調査方法のことだろうか。今回の方法では，アンケートの回収率は 100%，狙った人は必ず答えてくださるものと考えていいのか。

<事務局>

約 1,000 人は確実に回答いただける。

<橋本委員>

こちらが思った人口構成を反映したものか。

<事務局>

そうである。仮に、アンケートを送った 30 代のある方から何らかの都合で回答が返ってこなかった場合、同じ年齢層の別の方にアンケートが送られ回答いただくという形になり、1,000 人を対象としているのでほぼ 1,000 人のお答えがいただけるということである。

これまでは、3,000 人にお送りしても実際には 3 割いくかいかないかという回答しか得られていなかったの、京都市民の年齢構成と属性からいえば、よりそれに合った形の回答が得られるということになっている。

<橋本委員>

どういう人がどんな目的で登録されているのかがちょっと気になるが、それは分からないということでした。承知した。

<森実委員>

不満や希望を持ってはいるけれども、忙しくて余裕がなくそれを表明することができないという方の声が拾えるのか、そうした人がモニターに登録されているのかなと気になった。

<乾委員>

そのあたりは、量的調査なのか質的調査なのかということになってくる。両方やるのかどうかということになってくる。

<事務局>

モニターに登録されている方は、登録しているのだから忙しくても答えていただける方が多いと思うが、本当にお忙しい方にとっては、文書によるものだったらお答えいただけないだろう。結局、お忙しい方の声は拾いにくいということになる。

<ハッカライネン委員>

回答することで、何か報償はあるのか。それによっても違ってくると思う。

<事務局>

民間の会社で実施しているので、分からない。

<金田委員>

アンケートの項目について確認したい。先ほど、「前回のアンケートの質問項目と同様の設問を設定して、現在の状況を把握する、この間の変化を調べる」ということを話されていたが、その点はどうなのか。

<事務局>

単純に比較したいと思っているものでは、問 1 の「市政参加制度の認知度」である。その他にも、前回の内容と比較したいと思って設定している設問があるが、時代に合わせた回答項目にしているので、回答項目数が増えたりしている。単純比較はできないが、比較できる部分はしていきたい。

<金田委員>

「全てお選びください」という設問が結構多いなと思っている。情報を得るための様々なツールについて聴くのはいいと思うが、「活動に参加したくない理由」や「市民が市政により一層参加するために京都市がすべきこと」といった提案はどれもいい内容であり、どれも選択したくなってしまう。そうすると、調査として本当に欲しい回答が得られるかという点に疑問が残る。

「参加したくない理由」は、前は「2つを選択」だったが、今回は「全て」になっている、何か意図はあるのか。「回答数は何個が適切か」というのは色々あり一概には設定しにくいと思うが、「全て」でとった方がいい質問と、特に回答数を絞った方がいいものと、区別した方がよい。

<乾委員>

「全てお選びください」と答えさせながら、「特に、と思うものについては二重丸を付けさせる」というやり方もあると思う。3点、2点、1点と重みづけを変えるやり方である。

<金田委員>

問 7 については、何を聞きたいかによって聴き方が変わる。「現在活動している」情報が欲しいのか、「これまでの活動経験」を聞くのか。「とにかく半日でも参加していればいい」のか、「継続して参加している」情報が欲しいのか。それぞれ何を聞きたいかによって聴き方が変わる。

問 10 については、「まちづくり活動に参加する際に課題になること」と、「活動をしない理由」については、二つの質問が重なっている。どちらが聞きたいことなのか、セレクトした方がよいと思う。両方聞きたいなら二つ聞いた方がよい。

問 12 については、選択肢 12 の「インターネット（京都市以外のホームページ、SNS など）」と、選択肢 13 の「知り合いからの口コミ情報、SNS」、両方に「SNS」が記載されているが、違いが何かあるのか。言葉の使い方は気をつけた方がよいと思った。

あと、つまらないことだが、問 4 の選択肢 7、最後に読点がついている。

全て、こういった意図での設問かという確認である。アンケートを実施する前に整理しておいた方がよいと思うことを述べた。

<篠原委員>

前回のアンケートについてはおいておいて、初めてこのアンケートに答えるという視点で見てみた。

問1について。「市長への手紙」という項目がこの位置に来るのは仕方がないことかとは思いますが、市政参加の制度でいえば順番的にはもっと下の方ではないか。「市長への手紙」は書くという行為だけであり、参加、活動ではないので、あまり上でない方がよいと思った。

また、例えば「100人委員会」や「左京朝カフェ」のような活動については項目8「ワークショップ形式の意見交換会」に入ると想定されているのだと思うが、私は「意見交換会」だとは思っていない。そうした取組は実際に参加した人が「活動」をしているものだと思うので、どこに入るのか疑問に思った。「ただ意見を聴くもの」について把握したいのか、「活動しているものについても含む」のかということについては、どちらの状況を知りたいのかによるので、書き方を工夫してもらえると嬉しい。

問7について。同じく、「100人委員会」のような取組に参加した人たちは選択するところがない。項目の書き方が、ちょっと分かりにくいなと思った。

問9については、項目2「まちづくりカフェ等交流事業」の中に例として「左京朝カフェ」等が記載されているが、これは「利用」したことがあるかと書かれると違和感がある。参加者は、「参加」しているという認識を持たれていると思う。京都市の取組の体系としては「まちづくり活動」のこの設問に入ると分かるのだが、答える方としては問1や問7に入れ込んでもらった方が答えやすい。項目7「“みんなごと”のまちづくり推進事業」もそうである。「参加」するものがこの設問に含まれていると分かりにくい。

問15の属性について。性別は、選択肢3はカッコ書き（3（ ））」ではなくて、「その他」や「答える必要がない」と明記してもらった方が答えやすいと思う。

職業だが、今はフリーターの人や非正規の人がすごく多いので、2「会社員・公務員など給与所得者」を選択しない人が多いのではないかな。給与という認識を持つ人が少ないのではないかな。

外国籍の方か否かを聴くということについては、「外国籍」と言ってしまうと、いわゆる在日の方でずっと日本に暮らしているが国籍が日本で無い方がいらっしゃる一方で、来日して日が浅く、言葉の壁がある人もいると思う。国籍を聴くことで何を知りたいのか。何が聞きたいのか。

そうした方々全てを包括してなのか、言葉の壁や文化の壁でこういった情報が届かない方なのか、どういった人のことを知りたいのだろうか。

<ハッカライネン委員>

モニター制度だから、モニターになる外国人の方は、レベルの高い方であり、普通の回答ではないと思う。それでも、どのくらい入っているか分からないが、日本人と外国人の

違いのようなものが見れたらいいなと思う。確かに京都は在日の人が多い。外国人が市民参加についてどう思っているのか、知りたい。

今のアンケートでは難しいのなら、別の外国人向けのアンケートを作るのか。

<篠原委員>

「どのくらいの期間住んでいるのか」という視点で聞く方がよいのではないか。

<ハッカライネン委員>

そういった方法もあると思うが、日本に長く住んでいても日本語が全然分からない人もいたので、それだけでは分からない。

<壬生副座長>

一つ確認したい。モニターに登録されているのは京都市に在住されている方か。

<事務局>

そうである。

<壬生副座長>

京都市の「市民」の定義はもう少し幅広かったと思う。在勤、在学、色々あると思う。その人たちまで含めろというわけではないが、在住者だけの結果であるという点で分析する必要があると思った。

<佐々木委員>

問9について、「*」の空欄はこれから考えるということか。

<事務局>

そうである。実際には、不明な語句を選択するとその内容の説明文が出るような仕組みで実施できるようである。やはり、分かりにくい専門的な言葉等があると思うので、そこは分かりやすい言葉で説明したいと思っている。

<橋本委員>

4 ページの「*5, 6」のことだが、「京都市の」と限定されている。もちろんこれは京都市政への参加を調べるものだからだと思うが、例えば「市民がどれだけ参加したいか」という点を聞きたいのであれば、「京都市」でない場所に参加していることについても回答項目に入れてもいいのかもしれない。「市政に参加したい気持ちはあるが、京都市にその人に合った活動が無い」という場合もあるかもしれない。京都市に限定する項目と、しない項

目があってもよいと思った。

それと言うと、問7については、活動場所を京都に限定しなくてもよいと思う。例えば、大学生のゼミ活動などで、どこかの過疎の村にゼミぐるみで関わっているというような話を聴く。そういうことは、今回は考慮せず設問を設定しているのだろうか。

<金田委員>

やはり、何を聞きたいのか、ということである。活動をしているのかそうでないのか、という点を聴くのであれば活動場所を京都市に限定する必要はないし、市内の活動について聴きたいのであれば場所を限定していけばいいと思う。

<乾委員>

更に言うと、「市政参加」という言葉と、「市民参加」の整理がついていない気もしている。「市政参加」のこの10年の変化と、新しく「まちづくり活動」のこの間の変化と。分類しているのかもしれないが、この辺をどう整理するかという点。「京都市での市民参加」なのか、「京都市への市民参加」なのか、その点をもっとつきつめていくと、もっといいものになるような気がしている。まだ生煮えのような気がしている。

僕は今年からなので、「市民参加」というものが今一つ抑えきれていないところもあるので余計そう感じるのかもしれない。

<杉山座長>

京都市内の事業でなくてもそれは「市民の参加」ではないかという考えがあったが、どうか。

<森川委員>

アンケートの中で「まちづくり活動」を定義しているが、これまで「市民活動」と言っていて、こういった言い方はしていなかったのではないか。例えば「市民参加」と言うとき、「市政への参加」もあれば、「市民活動」もある、そんな構図でとらえていたような記憶があるが、「まちづくり活動」という言い方で定義することはあっただろうか。

<事務局>

市民参加推進条例の中で「市民が市政に参加し、及びまちづくりの活動を行うこと」と市民参加を定義しており、それに基づいた用語にしている。

<森川委員>

では、以前「市民活動」と言っていたものが、条例的には「まちづくり活動」だったということか。承知した。

<事務局>

「市民活動」というのとはほぼ同じかと思うが、条例上は「市政参加とまちづくり活動」という言い方なので、今回は条例に基づき記載している。

<杉山座長>

つまり、京都市内で行われる活動ということですね。

<佐々木委員>

問 7*5「まちづくり活動」の定義の中で「趣味のためのみの活動は除きます」と定義づけられてしまうとか、問 10「まちづくり活動に参加する際に課題となること」の中に選択肢 3「自分のための活動に時間をつかいたい」があるだとか、まちづくり活動と趣味が相反するもののよう位置付けられてしまっている。

個人的にはまちづくり活動を趣味で行うということはあるうらと思っている。「趣味から離れた身構えなければいけないもの」としてまちづくり活動を捉えてしまうのも、活動の発展を妨げてしまうのではないかと思った。

<事務局>

「まちづくり活動」についての補足である。前回アンケートを実施した 22 年度は、「市民活動」という言い方をしている。その中では、「自治会・町内会などの地域の活動、ボランティア活動、NPOなどの活動」といった活動を指している。これは、このアンケート作成時の事情ともつながるのだが、市民活動というものが、ボランティアだったり、NPOだったり、“はっきりした社会的な活動”というところにフォーカスを当てた言い方を使っているのかなと分析した。その上で、今回の「まちづくり活動」は、「門掃き」のように、「市民活動をしている」と声高らかに言わなくても、まちづくりにつながっている活動をしている方は沢山いるという認識を持ってそうした言い方にしている。そのため、条例の「まちづくり活動」というところに立ち戻りつつ、活動の内容についても前回の市民活動から広くした方が、「まちづくり活動に参加している」とポジティブに答えていただけるのではないかということで、こういう定義にしている。

<乾委員>

「ライトなものからハードなものまで」という言い方にするのか、「組織的なものから非組織的なものまで」という言い方をするのか、どちらを想定してそのどちらを把握しようとして設問を設定しているのか。

また、何らか分け方があると、カテゴリー化しておけば、どんなことが増えていくとかが後々分かるかもしれない。作るときに、そういったことは考えたか。分類のようなもの

について。

<事務局>

組織的な、個人とそれ以外の組織の形態について、特に問 7 については意識している。重さのことで言うと、まちづくり活動にもハードルが低いものから高いものまで様々あると定義はしているが、設問としては組織形態にフォーカスして設定している。

<乾委員>

であれば、「ボランティア活動」をどう定義するかが難しくなってくる。個人の意思でやっているのかということになると、判断が難しくなる。

どういう変化を見たいのか。個人の活動と伝統的な活動と、最近出てきた新しい活動を見ていきたいということであれば、そういう分け方もできるかと思う。

<内田副座長>

確かに、個人としての参加、活動自体はボランティアとして個人で参加していても、それが組織的に行われているものに参加したということになると、例えば「NPO 法人が主催して活動しているものに参加した」という風に答えられるので、そこが少し選びにくい。組織に属さず一人で何かやっている、それもボランティアとしての活動である。

<乾委員>

「ボランティア」の意味がどんどん広がっていってしまうので、「家の周りの掃除」ぐらいにとどめておいた方がいいかもしれない。寄付とか、例えばふるさと納税は別に選択肢として独立させるとか。

どんなことをやったからこれが増えたかどうかということが見たいのではないのか。であれば、どういうことを入れた方がいいとか、ここを増やすためにこういう支援をしていこうとか、そういう設定の仕方が必要である。どういうところを従属変数にするか、というところを考えないといけない。

町内会に関する調査やボランティアに関する調査は別でやっていると思うので、そうした調査と重なる部分は別に今回のアンケートで聞かなくてもいいかなと思う。

専門家の方と相談するということなので、そこでつめられるのかとは思いますが、ここでは意見としてお伝えしておく。

<内田副座長>

表記のことであるが、問 7 の選択肢 6「NPO 法人以外の法人格をもった非営利の団体(社団法人、財団法人等)としての活動」について、現在は「社団法人、財団法人」というものではなく、「一般社団、一般財団、公益社団、公益法人」となっている。過去にそういう法

人格があったので、それに引っ張られてしまうとよくないと思うので修正をお願いします。

<乾委員>

設問数やそれに付随する選択項目が多いので、ちゃんとしたデータが取れるかという問題はあります。

<篠原委員>

同じく、なるべく平易なものにしないと、答えづらくちゃんとしたデータが集まらないと思う。

<乾委員>

伝統的な町内会活動と、個人の活動と、新たな第三極の活動と、何種類かあってもいいかと思う。この辺ぜんぶひっくるめてデータとして取り扱う、ということもあってもいい。

<篠原委員>

問 13 の「対話」について。問いのところに、「京都市では、市職員と市民、市民と市民が、市政やまちの課題について直接対話する取組の推進を進めています」と書いているが、選択肢 1 で急に「行政と市民の対話の場をさらに増やす取組」とある。いきなり「行政」という言葉が出てきていて、それはどういった人たちを指すのかが分かりにくいかもしれない。

また、選択肢 7「市職員がまちづくりの現場に積極的に参加する取組」についても、どういう取組のことを指すのかというイメージがつきにくい。選択肢 1 との違いが分からない。

選択肢 6「まちづくりに興味がある市民の交流の場を増やす取組」についても、「伏見をさかになにぎつくばらん」のような各区のカフェ事業のことだと思うが、今までの説明とつながらないので、例を挙げてはどうか。

まちづくり活動なのか、市民活動なのか、この点も分かりにくくなっている。

問いの「市政やまちの課題について直接対話する取組」について、もう少しうまい書き方はないか。「議論」、「意見交換」よりはいいと思うが、「対話」はまだ一般的な語句ではないと思う。「平場で議論する」ということの方が、イメージがつきやすいかもしれない。「対話（意見交換）」でもいいと思うが、まだびんとこない人の方が多い気はする。あまり定義づけばかりするのも長くなるのでどうかとは思っている。この設問で「対話」という取組について言及していること自体はいいと思う。

<乾委員>

問 7 について、分かりやすくした方がいいのではと言ったが、他の設問で「参加したことがある」「利用したことがある」というのと、「参加したこと、利用したことはないけど

知っている」と分けて聞いているものがある。こういう聞き方をすることで、まちづくり活動についてもどのレベルで認識されているのか、ということをおある程度調べることはできるのかもしれない。

<佐々木委員>

問6の選択肢8「参加しやすい時間帯」について。休日と平日という分類をしているが、休日は普通に考えたら「土日祝」だが、美容師なら月曜日、不動産業界は水曜日など、業界によって休日は違うので、この書き方だと正確に分からないと思う。せめて「平日」、「土日祝」とか明記した方がよいのではと思った。

<杉山座長>

貴重な御意見、ありがとうございました。事務局、全てまとめるのは大変かと思うが、識者の協力の下、アウトラインをはっきりさせていただきたいと思う。

議題(2) 施策2, 3, 7, 9, 10の進捗管理について

<事務局>

(資料2「計画の進捗確認・分析調査について」説明)

<杉山座長>

説明いただいたことについて、ご意見、質問等あればいただきたい。

<篠原委員>

今、市民ファシリテーターの方はどのくらいの方が活動しているのか。

<事務局>

これまでに任命された市民ファシリテーターは200名規模でいるが、実際に積極的に活動されているのは2団体、それぞれ5～10名程度おられると聞いている。それ以外の方についても、地域の話し合い等において個人で活動されている方もいるようである。

<森川委員>

その活動されている団体さんというのは、主体的に頑張っているのだろうか。

<事務局>

今回の視察では、牧之原市職員だけでなく、市民ファシリテーターの方にも行政抜きで話を聴かせていただいた。お話を聴いて、非常に積極的に活動されていると感じた。「牧之原市のまちづくり」という観点だけではなく、ご自身の経験や技術を生かして、静岡県

や他の自治体に招聘されて、幅広く活躍されているようである。

<乾委員>

お金は支払われているのか。

<事務局>

行政が依頼して活動いただく場合には、3,500円程でお願いしているとのことである。

<乾委員>

以前京都府が派遣業務を行っていたが、それに近い形の取組だろうか。今はプロボノに変わっているが、以前は「地域力再生アドバイザー」という、牧之原市の市民ファシリテーターとよく似た取組をしていたと思う。一回派遣されるといくらか日当が支払われるという形だった。京都府の場合は、養成して任命するのではなく、ある程度の能力を持った方を登録するという形だった。リストがあり、「こういう人に来て欲しい」と要請すれば派遣され、地域のお役に立つ、という形である。

<事務局>

京都市でも「“みんなごと”のまちづくり事業」というものに取り組んでおり、市民サポーターを派遣している。77名が登録されており、希望する団体には市民サポーターを派遣する業務を行っている。「市民が市民をサポートする」という仕組みで言うと、牧之原市の取組に近いものかと思う。

<篠原委員>

課題は何なのか。

<事務局>

色々お話しいただき、この場でお話しできることに限りはある。市民ファシリテーターの市の中の位置づけに関しては、色々ご苦労されたようである。

<篠原委員>

以前市長の話は聞いたことがあり、「えいやっ」で始まった制度であるとのことだったので、課題はないのか気になる。

<乾委員>

不安定なところを誰が安定させるのか、というところで言うと、公務員の数が少ない自治体であれば誰かに頼らざるを得ないというところで、市民にお願いするという形になっ

ているのだろう。

<事務局>

京都市は 100 人委員会等の取組を進めてきており、市民の中にまちづくりの担い手となりうる方たちが多くいる状況だと思っている。そういったまちづくりの盛り上がり、職員の盛り上がり、両方が盛り上がることで、市全体の活動も盛り上がるという意識で、現在職員の育成も行っているところである。

<佐々木委員>

どのぐらいの時間をかけて視察をしているのか？

<事務局>

視察先の職員の方と話した時間として、制度の大枠についてレクチャーを受けた時間が質疑応答を含めて 2 時間程度である。それとは別に、職員の方と市民ファシリテーターの方と同席してヒアリングをした時間が 2 時間程度である。また、その日の夜に開催された地域リーダー育成プログラムに 1 時間参加した上で、翌日にファシリテーターの方のみにヒアリングをした時間が 2 時間程度である。

<杉山座長>

具体的に京都市に生かせそうな取組だったか。「ここが良かった」等の実感はいかがか。

<事務局>

市民のファシリテーターを育成するという点では、京都市は、能力が高いまちづくりの取組への参加者が多いので、育成よりは登録等のつながり方をどうするのが課題だと感じた。また、高校生を対象としている点は、前向きで且つシチズンシップ教育の観点から、今後のまちづくりを担う方、または関わる方を増やす意味で、良い取組である。京都でも若者にリーチする取組を考える必要があると感じた。

高校生の時期に企業が入り込むことで、その地域の企業に就職で戻ってくる循環も見据えていると思われる。

<乾委員>

文科省の施策で、高校を中心に地域で企業と共にコンソーシアムを作り、地域でどのような人材が必要かをコンソーシアムで考え、それを教育プログラムの探求等に落とし込んでいく活動に補助金が出るものがあり、地域魅力化型・グローカル型・プロフェッショナル型がある。グローカル型の委員をしているが、地域に問題を抱えているところは、教育委員会の取捨選択等もあるが、その様な施策を使って解決しようとしている。色々な高校

やコンソーシアムの取組を見たが、京都においても、高校生が地域のリアルな課題を理解していく機会があった方が良い。選挙権もあるのだから、高校生等の世代から育てるのも有効だと思われる。

<杉山座長>

貴重な御意見，ありがとうございました。

議題（3）令和元年度第1回市民公募委員サロンの実施結果等について

<事務局>

（資料3「令和元年度市民公募サロンについて（案）」説明）

<杉山座長>

前回の市民公募委員サロンに参加された方もいると思うが、今年度末に開催予定の市民公募委員サロンをどのような形で進めていけばよいかという観点で御意見をいただきたい。

<乾委員>

この資料は当日の内容がまとまっていて良いと思う。参加した私が「良いな」と思っている事が、参加されなかった市民公募委員の方に伝わってほしい。

次回については、参加者が多ければ良いと思うし、内容がより広まる。集まる人数が、例えば12名から20名になれば成功とか、多数の参加を目指すのも有ると思う。

<事務局>

参加者から、開催時期についてはいくつか意見をいただいている。年度末になると、参加する審議会に生かせない、年末は忙しい等である。

<乾委員>

人によっては、ネット中継での参加など、リアルでの参加以外の方法もある。

<内田副座長>

資料3の「サロンだより」は、市民公募委員の皆さんに配布されるのか？

<事務局>

配布予定である。

<壬生副座長>

市民公募委員さんに加えて、附属機関等の事務局にも配布して欲しい。市民公募委員さ

んの意見を聞いていると、委員さん自身が変わっていく、頑張っていくといった意見もあるが、それを事務局や専門知識を持った委員さん、座長が受け止めて、少しでも会議の場の雰囲気を良くしていく工夫ができれば良いかと、サロンに参加する度に思う。附属機関等の事務局に見てもらふ機会を増やしてほしい。

<内田副座長>

サロンが始まる前の公募委員さんとの話の中で、自身が参加する審議会の事務局からは市民公募委員サロンの案内が送られて来ず、自分で情報を入手して参加したと聞いた。フォーラムの事務局から各審議会の事務局に案内を送っているが、各審議会の事務局が公募委員さんに案内しているかまで確認することは難しく、できないと思う。ただ、そうした事実があった事は共有しておきたい。

<池田委員>

今日の様な、型にはまった会議らしい会議だと、緊張して発言しにくい。サロンではテーマがなく、自分が話し合いたいことを、同じ立場の人と話し合えるのが楽しく、思っていることを素直に言える。次回のサロンでも、特定のテーマを決めずに、集まって話し合える場であることを大切にしてほしい。

<杉山座長>

兼松委員は、雰囲気作りがとても上手で、話しやすい雰囲気がとても良かった。

サロンの内容は、皆さんが納得する方向性で行えていると思う。開催時期や参加人数、特に呼び掛け方法を工夫して、多くの方に来てもらえれば、大分満足してもらえと思う。改善して続けていけば、サロンの認知度も上がると思う。

<篠原委員>

審議会の事務局の方にも、できるだけ参加してほしい。審議会の事務局の方は、自身の会議では意見を聞く側になるので、市民公募委員と話し合うのは、サロンでないとできないと思う。前回のサロンでは2名の職員の方が参加されていて良かったが、もっと多くの職員の方に参加してほしい。

<事務局>

サロンに参加して、事務局の審議会の運営方法が、市民公募委員の方の話しやすさにとって重要であることを特に意識できた。御指摘いただいた、雰囲気作り等の内容を庁内で共有し、その内容を意識して審議会運営できるように進めていきたい。

<杉山座長>

最後に報告事項について、事務局から説明をお願いします。

4 報告事項

報告事項（１）

<事務局>

（資料４「新たに設置された附属機関等に係る協議結果（一覧）」報告）

（質問、意見等なし）

報告事項（２）

<事務局>

（資料５「市民参加に関係する新しい事業や取組」報告）

（質問、意見等なし）

<杉山座長>

以上で本日の議題、報告事項は終了となる。皆さん、どうもありがとうございました。

傍聴者の方、何か御意見があればどうぞ。

<傍聴者>

まちづくり活動の主体は誰なのか。「市民」なのだと思うが、「市民参加」の中に「まちづくり」を入れると、参加する主体は誰なのかが分かりにくくなる。言葉の定義がちゃんと共有されていないことで、話が浮いてしまう気がした。

7 閉会

<事務局>

本日も闊達な御意見、ありがとうございました。アンケートも色々と御意見をいただいたので、後日整理をして改めて提示する。設問を増やせない等の制約はあるが、できる限り御意見等を反映して、改めて諮らせていただく。

以上